

(別紙様式3)

令和7年度あいちラーニング推進事業研究報告書【主管校】

学校番号 116

学校名 愛知県立安城高等学校

校長氏名 佐々木 亨

研究責任者職・氏名	教諭・	事務担当者職・氏名	主任・
研究テーマ	確かな学力に基づいた課題発見・解決能力の養成を目指した主体的・対話的で深い学びの推進		
本年度の研究目標	(1)自ら学習を調整しつつ、粘り強く課題を解決しようとする態度を養成する (2)主体的・対話的な学びを通して、批判的思考力を育む (3)知的好奇心を高め、自ら探究する意欲を育む		
研究の実施内容			
実施月日	内 容		備 考 (対象生徒等)
4月1日 5月19日 ～6月13日 5月27日 7月23日 8月1日 9月3日 11月10日 11月19日 12月24日	令和7年度あいちラーニング推進委員会発足 授業を見る会 名古屋大学大学院教授 柴田好章 氏による視察 現職研修 名古屋大学大学院教授 柴田好章 氏による助言 第1回連絡協議会 愛知教育大学附属高等学校視察 公開授業（国語・理科・英語・家庭）及び研究協議会 指導・助言者 名古屋大学大学院教育発達研究科教授 柴田好章 氏 愛知県教育委員会 高等学校教育課 中島浩平 指導主事 愛知県総合教育センター学校支援研究課 原田孝志 研究指導主事 主管校 12校合同研究成果発表会にて成果発表 第2回連絡協議会		全職員 該当教員 全職員 主管校・重点校担当者 該当職員 2年5組 古典探究 2年7組 物理 2年6組 英語コミュニケーションⅡ 1年2組 ファッション造形基礎 県立学校8名 該当職員 主管校・重点校担当者
研究成果の評価及び普及・還元に関する実績			
1 本年度の研究・取組について (1) 研究テーマ 本年度の研究テーマは、学校としてより発展的な研究に取り組むこと目指して、「確かな学力に基づいた課題発見・解決能力の養成を目指した主体的・対話的で深い学びの推進」とした。昨年度は「確かな学力を養う」ことを目標に掲げていたこともあり、本年度はさらにそれを発展させ、各教科を中心に「課題発見・解決能力」を育成する方法について研究することとした。			

(2) 研究目標

「課題解決能力」「批判的思考力」「学習意欲の醸成」を目指し、3つの研究目標を設定した。本校生徒に特に必要だと学校として考えている「主体性」を育みつつ、自ら考え、学び、判断する力を身につけることで、絶えず変化する社会の中で生き抜く力を育てることを目指している。

2 連絡協議会について

(1) 第1回（令和7年8月1日）

地区主管校である本校と重点校である刈谷高校、刈谷北高校の3校で開催した。各校の研究計画、取組状況の報告及び意見交換、ICT機器の活用状況等について情報交換を行った。また、本校が昨年度2月に訪問した三重県立名張青峰高等学校の取組について情報を共有した。

(2) 第2回（令和7年12月24日）

各校の取組状況及び結果についての報告及び意見交換を行った。また、本年9月に訪問した愛知教育大学附属高等学校の取組について情報を共有した。

3 あいちラーニング推進委員会について

校長、教頭、教務主任、図書情報主任及び各教科主任の計13名による委員会を構成した。2年目である今年度は、主に教科主任会での情報交換や研究状況の確認で代替し、職員からの意見や各教科での課題等を共有した。

4 現職研修について

本校の研修機会である「授業を見る会」（5月19日から6月13日まで）を通して、教科の垣根を越えて職員が相互に切磋琢磨する機会を設けている。また、あいちラーニング公開授業（11月10日午後開催）においても職員は授業を相互に参観し、授業力向上を目指し研鑽を重ねた。

5 あいちラーニング推進事業指導助言者による講演及び指導・助言について

(1) 令和7年7月23日(水)

名古屋大学教育学部教授の柴田好章氏に事前（5月27日）に本校の授業を御覧いただき、その授業を踏まえた御指導・御助言並びに御講演をいただいた。

(2) あいちラーニング公開授業（11月10日午後開催）

名古屋大学教育学部教授の柴田好章氏、愛知県教育委員会高等学校教育課の中島浩平指導主事、愛知県総合教育センター学校支援研究課の原田拳志研究指導主事に御指導・御助言をいただいた。

6 各教科の取組について

【国語科】

(1) 仮説

協働的な活動を通して学びを深めたと実感できる取り組みが、生徒の主体性を育むと考える。このような授業を実施するにあたり、ロイロノートの有効的な活用を模索する。

今回は2年生普通科文系2クラスを対象に、古典探究の授業で研究を進めた。

(2) 実践方法のねらい

① 多様な見方・感じ方を知ることによって作品理解を深めることをねらいとし、正解のない問い作りに取り組む。

② 意見の交換・共有は、適宜ロイロノートを使用して行う。

(3) 実践の概要

使用教材：兼好法師『徒然草』『花は盛りに』、

本居宣長『玉勝間』『兼好法師が詞のあげつらひ』

活動実践：両作品の比べ読みをした後、「兼好法師が詞のあげつらひ」のレビューを作成し、発表をする。比べ読みについては、兼好と宣長の意見の相違を表にまとめさせるところまで実施した。

(4) 具体的な活動

I 事前学習

1. 5人1組のグループを作る。
2. それぞれの担当箇所（下記参照）を決め、個々で調べる。
ロイロノートのカードに箇条書きでまとめ、資料は提出箱（共有）に入れる。
 - A 兼好の出自／プロフィール
 - B 宣長の出自／プロフィール
 - C 兼好が『徒然草』を書いた当時の時代背景
 - D 宣長が『玉勝間』を書いた当時の時代背景
 - E 兼好と宣長の思想
3. 他班で同じテーマの人と情報を共有し、改善した資料を提出箱に上書きする
4. 元の班に戻り、提出箱に入れた資料を見せながら、各自まとめた情報を共有する

II レビューの作成・発表

Iの活動を行った後、個々でレビューの発表資料をロイロノートのカードに作成させ、グループ内発表を行った。その後、一番説得力があった生徒を各グループから選出し、代表者はクラス全体の前で発表した。以下は実際に生徒が提出した原稿である。

私は本居宣長の「兼好法師が詞をあげつらひ」に星1つをつけました。その理由は2つあり、1つ目は本居宣長が兼好法師を批判している作品ですが、両者の主張はあまり対立していないように見えるからです。まず兼好法師は、徒然草冒頭の「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。」のように、盛りの状態だけでなく物事の始め終わりにも情趣があるという主張で、決して盛りに情趣がないとは書いていません。しかし、本居宣長は、兼好法師の考えを「作りみやび」とまるで盛りを望む一般の人の心と反対であるかのように批判しました。つまり、国学者である本居宣長が、仏教の僧侶であるというだけで兼好法師の意見を深く理解しようとしなかったんだと思います。2つ目は、終わりがあがることで盛りがより映えると感じるからです。例えば、桜が満開になっている光景はとてもきれいです。桜が綺麗に思う理由として、春だけ咲くというのが1つあると思います。つまり春が終わっていくにつれ散るの分かっていて、だからこそその儚い美しさをいち早く楽しむために開花予想が注目されたりわざわざ集まってお花見したりするんだと思います。実際桜が散らなかつたらもちろん綺麗だけれど若干飽きるかもしれない年中お花見するわけでもない。つまり、「終わり」があるからこそ実感できる「今」「盛り」だと思いました。以上の理由により私は本居宣長の「兼好法師が詞をあげつらひ」に星1つをつけました。604語

私は本居宣長の「兼好法師が詞をあげつらひ」に星2をつけました。宣長に賛成する理由は3つあります。一つ目は、盛りの状態を見たいからわざわざ見に行くわけで、盛りじゃないと分かっていながら見に行こうとは思わないからです。確かに、兼好法師の言う通り、盛りでない状態も趣深いものだとはおもいますが、それは盛りを見に行った結果がその状態であったから仕方なくこの状態も悪くないと考えるようになるだけで、実際、蕾の時や散っている時はお花見しようとする人はほとんどいないし、逆に満開の時期は人で溢れかえっているの、みんな盛りの状態を求めているという宣長の意見は正しいと思います。二つ目は、恋愛に関する意見についてです。よく付き合う前の駆け引きの時期が一番楽しいという意見を聞きますが、その時期が楽しいからといって告白されることを望まない人や断ってしまうという人はほとんどいないでしょう。結局は付き合ってからデートや記念日を楽しみ、深い仲になることを望んで想像しながら駆け引きをするのが楽しいのであって、相手が自分を好きになるだけでは恋愛は楽しいとはいえないと思います。しかし、終わってしまった恋を思い出したり、失恋の辛さを抱えて長い夜を過ごしたりすることが情趣深いという点では兼好法師に賛成します。このように、兼好法師に同意する点もある中で宣長の意見に賛成する点が多かったので、私は宣長の意見に星2をつけました。597

「発表を聞いて、自分の意見は変わったか？」というアンケートでは、「変わった」と答えたのは10パーセント程度であったが、「自分の主張と違うからこそ、そういう見方もあるのか、と知れておもしろかった」という意見や、「同じ主張でも、理由づけや根拠が違い、勉強になった」という意見が見られ、「発表を通して学びが深まったか」という問いには、全員が「はい」を選択した。

(5) 成果・課題・展望

協働的な活動において、ロイロノートを使うメリットは大きかった。私が用いた機能は先述の通り、「提出箱」を共有することで自分の考えを伝え合うという方法である。紙を集める時間に比べて短時間で全員の考えがわかり、取り上げたい生徒のカードを複数ピックアップして比較できることは授業の双方向性・活発化につながった。

グループワークにおいては、共有ノートを活用することも有効であり、生徒側もグループメンバーが今何に取り組んでいるのかが一目でわかるうえ、教員側も全員の状況を把握して適宜補助することができた。パワーポイントで資料を作成して発表するというこれまで実施してきた方法に比べ、ロイロノートはよりグループワークに適していると考えられる。

反省点は、「提出箱」の機能では、共有以外を特に活用できなかったことである。今後は、「提出箱に入れる→他の人の考えに触れる→改善→提出」の繰り返しをふまえて、単元の最

後に自身の「提出箱の履歴」の振り返りをさせることで、理解を深められたという実感につなげていきたいと考える。

今回の研究を通して、ICT を使用した学習は準備に時間がかかるという手間はありますが、全員の意見を即時集約・共有できる点はなにより効果的であると実感した。

【地歴公民科】

(1) 仮説

〈地理総合〉

身近な地域課題を題材に、地図や統計資料を活用した役割分担型の共同探究活動を行うことで、生徒は地理的事象を位置・分布や相互関連の視点から多面的・多角的に捉えるようになる。さらに、他者との対話を通して考えを比較・検討する過程が思考の深化を促し、根拠を明確にした説明や主体的な発言の増加につながると仮定し、本研究仮説を設定した。

(2) 実践方法

テーマ：「身近な地域における都市課題（例：ヒートアイランド現象）」

① 導入

- ・都市課題に関する基礎知識を確認する。
- ・気温分布図、土地利用図、人口分布図など複数の資料を提示する。
- ・個人で「原因は何か」「どのような影響があるか」を記述させる。

② 協働探究活動

1. 4人1組で役割分担を行う。
→（司会・資料分析担当、記録担当、発表担当）
2. 探究課題を設定する。（地域課題の主な原因は何か。また、どのような対策が有効か。）
3. 活動内容
 - ・複数資料を関連付けて分析する。
 - ・位置・分布・相互関連の視点で整理する。
 - ・根拠を明確にして解決策を提案する。

③ 発表・共有

- ・各班が分析結果と解決策を発表する。
- ・他班から質問を受け、再検討する。

④ 振り返り

- ・自分の考えがどのように変化したか記述する。
- ・根拠を用いて説明できたか自己評価する。

(3) 実践報告および成果・課題・展望

〈成果〉

- ① 発言の増加がみられた。役割分担を明確にしたことで、これまで発言が少なかった生徒も話し合いに参加する姿が見られた。
- ② 資料を関連付けて考察する姿が増えた。単一の資料に基づく意見ではなく、複数資料を根拠として説明する発言が見られた。
- ③ 多面的・多角的な視点が育まれた。他班との交流を通して、自分とは異なる視点に気づき、考えを修正・深化させる様子が振り返りから確認できた。

〈課題〉

資料の読解力の差により、議論の深まりに班ごとの差が生じた。また、話し合いが活発になる一方で、時間配分が難しく、十分にまとめの時間を確保できない場面もあった。さらに、役割が固定化すると主体性に偏りが出る可能性も見られた。

〈展望〉

今後は、資料読解の基礎的指導をより丁寧に行い、思考の土台を整える必要がある。また、役割のローテーション制を導入し、全員が多様な役割を経験できるようにしたい。さらに、ICTを活用した資料共有やフィールドワークの導入を通して、より実践的で深い学びへと発展させていきたい。

【数学科】

(1) 仮説

○仮説1

自らの志望大学や、志望学部を踏まえ演習する問題を選び、単元の目標を設定すれば、主体的に学ぶ生徒になるだろう。

○仮説2

仮説1で選んだ設定や問題を授業内で発表することで、クラスメイトの志望大学を知り、同じ目標を掲げる仲間を見つけることで、対話的に学ぶ環境が整うだろう。

(2) 実践方法

【大学調べ 仮説1の手だて】

生徒は、夏休み課題として赤本等を用いて志望大学や学部について調べてPowerPointにまとめ、Microsoft Teamsに提出する。志望大学の出題傾向と難易度、合格者の平均点などを参考に、今後どの問題を重点的に勉強していきたいかを考察させる。

【授業の進め方 仮説2の手だて】

- ① 授業開始時に1・2名発表者を選び、課題で提出した資料について発表させる。
- ② 教師は、本時の発表に則した問題を選定し、プリントを準備しておく。
- ③ プリントを配布し、問題の方針を3分程度個人で考える時間を作る。
- ④ 4・5名のグループを作り、個人の方針発表し、グループの方針を決定させる。
- ⑤ グループの代表者は、グループの方針を発表する。
- ⑥ 全体で話を聞き、各自で問題演習に取り組む。

(3) 実践報告および成果・課題・展望

授業内で1問解く時間を削ってでも、主体的に取り組む姿勢を養うことで、家庭学習時間の確保を意識した。生徒は意欲的に参加し、問題について話す機会を生むことができた。授業の中で、生徒の言葉を拾い、作問や出題に活かす作業は業務負担としては増加してしまうが、生徒とのコミュニケーションが増し、生徒と教師の対話的な活動に繋がったと考えられる。今回は、3年生が対象で一定の期間を設けて複数回実施したため、本研究のみによって主体性や協働性が増したことを結論付けることはできないが、主体的で対話的な学びの役割を担うことはできた。本研究を通して、教師自身も目の前の生徒の実情と需要を知ること、寄り添った授業研究を行うことができた。各教科の立場で夢の実現に向けて主体的・協働的に学び、最後までやり抜く力をもつ生徒を育てていく必要があると感じた。

【理科】

(1) 仮説

協働的なデータ分析とモデルに基づく推論を通して学びを深めたと実感できる取り組みは、生徒の科学的理解の向上につながると考える。特に、円運動における物理量の関係を実験的に確かめ、得られたデータを班内外で共有・比較する活動は、理論式と実験結果を往復しながら現象を説明するモデルベース推論の育成に寄与する。また、他班のデータや考察に触れることで、自分たちの見方を適宜見直すといった軽度の批判的思考も促されると考える。さらに、こうした比較・検討の過程で、自分の理解を部分的に更新するような小さな概念変容も期待できる。

今回の実践では、高校2年生を対象に、等速円運動の実験を通して、回転半径・周期・速さ・向心力の関係を多面的に捉え、データの分析・比較・考察を行う授業を実施した。特に、周期の増加を「比例」ではなく「関数的」に捉え直すことや、半径を短くすると速度が上がるという直感に反する関係を理解すること、さらにハンマー投げへの応用を通してモデルを一般化することで、生徒がより主体的にデータの考察を行うことができるのではないかと仮説を設定した。

(2) 実践方法

本実践では、以下の3点を中心に授業を構成した。

① モデルベース推論の育成

生徒 A 記述

円運動における半径・周期・速さ・向心力の関係を、実験値と理論式の双方から捉えることで、物理量の変化がどのように現象へ影響するかを自ら説明できるようにすることをねらいとした。例えば、生徒 A は「半径が大きくなると周期は 2 次関数的に増加する」と述べ、式とグラフを往復しながら関係を捉える姿が見られた。

半径が大きくなると周期は 2 次関数的に増加する。

② 軽度の批判的思考の促進

生徒 B 記述

Excel や Teams を用いて複数班のグラフを比較することで、測定値の違いや考察の差異に気づき、必要に応じて自分の解釈を調整する姿勢を育てることを目的とした。実際に、生徒 B【7】は他班のグラフと比較しながら「周期の増加は比例ではなく 2 次関数的である」と修正し、理解を深めていた。

半径が大きくなると周期は 2 次関数的に増加する。

③ 小さな概念変容の促進

他班のデータや考察に触れることで、自分たちだけでは得られなかった視点に気づき、理解をより妥当な方向へと整えていく経験を重視した。特に、探究①「糸が下がっても周期は変わらない」では、生徒 C が「周期を求める式に角 θ はないため変化しない」と述べ、式の構造から現象を説明する姿が見られた。

生徒 C 記述

<使用教材・対象・単元>

使用教材：等速円運動の実験装置（物体 X、たこ糸、円筒、おもり）、タブレット端末、Excel、Teams
対象：高校 2 年生（物理）
単元：円運動

活動① 下に糸が下ると周期と糸の長さの関係は変化するのか？
式に θ はないため変化しない

(3) 実践の概要

本実践では、等速円運動における物理量の関係を実験的に確かめ、得られたデータをもとに理論式との対応を検討する活動を行った。前半では、向心力を一定に保ったまま回転半径を変化させたときの周期・速さの変化を調べ、後半では、回転半径を一定に保ったままおりの質量（向心力）を変化させたときの周期・速さの変化を調べた。

生徒は物体 X を水平面内で等速円運動させ、10～20 回転の時間を測定して周期を求めた後、Excel にデータを入力し、グラフを自動生成した。班内での共有に加え、Teams を用いて他班のグラフも閲覧できる環境を整え、複数のデータを比較しながら考察を深められるようにした。

また、実験後には、「グラフの形状（比例関係・二乗関係など）」「理論式との対応」「他班との違いの理由」について、個人とグループの両方で考察を記述させた。さらに、探究的な課題として、「回転が遅くなると糸が水平面より下がる理由」「回転中に半径を短くしたときの周期・速さの変化」など、現象と式を往復しながら説明する問題にも取り組ませ、モデルベース推論を促す構成とした。

(4) 実践報告および成果・課題・展望

① 成果

Excel や Teams を活用して班内外のデータを即時に共有できたことで、生徒が複数のグラフを比較しながら考察を深める姿が多く見られた。特に、回転半径を変化させた際の周期の増加を「比例」ではなく「2 次関数的」と捉え直す生徒が全体の約 40% に達し、モデルベース推論が自然に生まれていた点は大きな成果である。

また、探究①では約 50% の生徒が「周期を求める式に角度 θ が入らないため周期は変わらない」と正しく説明し、式の構造から現象を説明する姿が見られた。探究②では約 35% が「半径を短くすると速度が上がる」という直感に反する

関係を理解し、生徒 D のように「速度と周期の両方の変化」を同時に説明できる例もあった。さらに、ハンマー投げへの応用では約

活動② 回転半径を短くすると、速度は上がるが、周期は大きくなる。

生徒 D 記述

60%の生徒が「回転中は半径を大きく、投げる瞬間に半径を短くする」という正しい物理モデルを適用できており、生徒Eのように、角運動量保存の考え方を自然に言語化する姿が見られた。

生徒E記述

仮説① 半径が大きくなると、向心力一定より半径が小さくなるほど、角速度は小さくなるが、角速度は小さくなるほど、周期は長くなる。
 $F = mrv\omega^2$ $T = \frac{2\pi}{\omega}$

② 課題

一方で、速さの変化に関する誤解は依然として根強く、全体の約40%が「半径が大きくなると速さも大きくなる」と誤解していた。また、探究②では「周期が短くなる」までは書いても「速度が上がる」まで言及できない生徒が多く、思考の深まりに差が見られた。

さらに、他班のデータを比較する際に、単なる「違いの指摘」にとどまり、物理量の関係に踏み込んだ説明に至らないケースもあり、モデルベース推論をより確実に促すための支援が必要であると感じた。

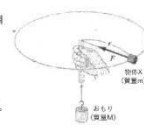
③ 展望

今後は、実験後のデータ分析や考察に十分な時間を確保するため、事前にExcelのテンプレートを整備したり、操作手順を簡略化するなど、思考に集中できる環境づくりを進めたい。

また、Teams上で他班のグラフを比較する際に、着目すべきポイント（比例関係、二乗関係、傾きの意味など）を示すことで、モデルベース推論をより確実に促す支援ができると考える。

さらに、提出したグラフや考察の履歴を振り返る活動を取り入れることで、生徒自身が理解の変化を自覚し、学びの実感につながるような授業設計を目指したい。

本日の実験 前半戦【等速円運動】



- 実験の目的
 - …等速円運動をする物体の質量、回転半径、周期と向心力の関係について調べる。
- 実験の準備
 - …おもり、物体X、たこ糸、円筒、タブレット（撮影・分析用）
- 課題①
 - …向心力を一定に保ったとき、回転半径と周期、速さの関係について考える。
 - 【予想と仮説を実験シートに記入】
- 実験手順①
 - 物体Xを糸の一端に結び付け、たこ糸を円筒に通して他端におもりを吊るす。
円筒を回す上でのおもりの役割は、()。
 - 円筒を手で持って回転させ、物体Xを水平面内で等速円運動させる。回転を調節し、円筒の上端にちょうど印がくるように回転させる。
 - 回転が安定してから、物体Xが10~20回転する時間を測り、回転周期を計算する。
→ 10~20回転する時間を測る理由は、()であるから。
 - 回転数を調節して印の位置を変えて、同様に周期を求める。
 - 回転半径と求めた周期から速さを求める。
- 実験結果①

回転半径 r[m]	0.10 [m] (10 [cm])	0.20 [m] (20 [cm])	0.30 [m] (30 [cm])	0.40 [m] (40 [cm])	0.50 [m] (50 [cm])
周期T[s]					
速さv[m/s]					

※この値をエクセルファイル(実験ワーク①)に入力しましょう。グラフが自動で生成されます。
- 実験考察①
 - エクセルのグラフや実験結果①を受けて、
【向心力を一定に保ったとき、回転半径と周期、速さの関係について考察】を実験シートに記入する。
※個人とグループで分けて記入。
※必ずグラフの様子にも触れること。

【保健体育科】

(1) 仮説

創作ダンスや現代的なリズムのダンスを行っ

ていく中で、①役割分担を明確にしたグループ活動②対話を通じた振り返り活動の2つを取り入れることで、生徒のダンスにおける表現力や主体性、仲間と関わる力が高めることができる。

ダンスとは本来、仲間と関わりながら創造する活動である。そこで、単に振付を覚える学習ではなく、役割をもって協働し、対話を通して作品を高め合う過程を重視することで、生徒一人一人が安心して表現に挑戦できる環境を整える必要がある。また、ダンスに対して苦手意識をもつ生徒が一定数は存在する。その理由として、技能差が大きいことや「正解」が見えにくく、自信を持ちにくいことがあげられる。

生徒一人で考えさせるのではなく、対話と役割を通して安心して挑戦できる環境を整える必要があると考えた。協働的な学びの充実が、生徒の主体的な参加と表現の深化につながるのではないかと仮定し、本研究仮説を設定した。

(2) 実践方法

○リーダーの育成

本実践では、各グループにリーダーを配置し、単なるまとめ役ではなく、「対話を促す存在」として育成することをねらいとした。

まずリーダーの役割を明確に提示する。具体的な役割として、①全員の意見を引き出すこと、②活動の進行を調整すること、③困っている仲間を支援することとした。授業内では、リーダーのみを集めたミーティングを設定し、進行の工夫や声かけの方法を共有した。また、「否定しない」「全員が意見を書き出す」など具体的な行動指針を示した。

これにより、技能の高い生徒が主導する形ではなく、対話を中心とした協働的な学習環境を整えた。

○連帯感

連帯感を育むために、以下の三つの手立てを行った。

- ①ウォーミングアップでのアイスブレイク活動
- ②共通テーマの設定
- ③成功体験の共有

この三つの手立ては、「一緒に作品をつくっている」という意識を高めることができる。作品をともに作りあげるといふ協働への意欲向上を図った。

○振り返りシートの作成

協働的な学びを可視化するために、毎時間振り返りシートを活用した。内容は以下の三観点とした。

- ①今日の自分の役割と活動
- ②グループの良かった点
- ③次回に向けた改善点

記述式とし、単なる感想ではなく、「具体的な行動」を書かせることを重視した。また、数時間ごとに過去の記録を見返す時間を設け、自信の成長を自覚できるようにした。

これにより、生徒は協働の過程を客観的に振り返ることができ、主体的な改善行動へとつながった。

(3)実践報告および成果・課題・展望

本実践を通して、次の三つの成果がみられた。第一に、生徒の主体的な参加態度の向上である。役割を明確にしたことで、一部の生徒だけが活動を進めるのではなく、全員が何らかの形で作品づくりに関わる姿がみられた。特にリーダーが対話を促す役割を担うことで、発言の少なかった生徒の意見も取り入れられるようになった。第二に、表現の質の向上である。振り返りシートを活用し、改善点を具体化したことで、動きの工夫や構成の変化がみられた。話し合いを経て修正を重ねる過程より、テーマに沿った一体感のある作品へと高まっていった。第三に、連帯感の醸成である。途中発表や肯定的なフィードバックを通して互いに認め合う雰囲気生まれた。「みんなで作った」という意識が芽生え、発表時の表情や声かけにも変容がみられた。

以上より、協働的な学びの視点を取り入れた指導は、生徒の主体性と表現力の向上に一定の効果があったと考えられる。

一方で、いくつかの課題も明らかになった。まず、リーダーの力量によっての影響が大きいことである。対話をうまく促進できるグループと、形式的な話し合いにとどまるグループとの差がみられた。リーダーへの継続的な支援の在り方が今後の課題である。次に、話し合いの質の向上である。「楽しかった」「よかった」といった感想にとどまる場面もあり、表現を深めるための具体的な言語化が十分と言えない部分もあった。対話を深めるための問いの工夫が必要である。

最後に、時間配分の問題である。創作・話し合い・振り返りの時間を十分に確保することが難しく、活動がややあわたたしくなる場面もあった。

今後の展望として、リーダー育成の段階的指導プログラムを作成し、対話を促す具体的なスキルを系統的指導していきたい。リーダーの育成は、本授業だけでなく、学校行事やクラス運営でも必要な力であり、様々な場面で必要となる力の育成を目標としていきたい。また、振り返りシートの問いを精選し、より思考を深める記述へと改善することで、協働の質を高めたいと考える。

ダンス領域だけでなく、他の運動領域においても役割設定や対話活動を取り入れ、体育科全体として協働的な学びを推進していくことを今後の課題とする。

【芸術科（美術）】

(1)仮説

以下の2点について仮説を立てた。

①表現と鑑賞を段階的に繰り返す授業展開をすることにより、それぞれの理解をより深めながら、造形的な視点や表現方法を育むことができる。

②表現では、各自で課題を設定し、グループで共有しながら制作することで、自分だけでなく、他者の設定した課題も含め、互いに解決しようとする態度を育むことができる。

デザインとは「計画すること」であり、制作することに限らない。また、その計画とは課題解決のためであり、自ら課題を見つけることが重要となる。「やらされる」意識ではなく、自ら探究・解決しようとし、互いに客観的意見を伝え合うことで、より実践的な学びにつながるのではないかと考え、本研究仮説を設定した。

(2)実践方法

単元：サインのデザイン

興味のある事や世の中の不便だと感じることを基に、それを実現・解決するための会社を設定し、その会社のロゴマークとアイテムを制作する。

配当時間：16 時間

○導入(4 時間)

【鑑賞】(1 時間)「デザインとは何か」について、世の中の実践例を鑑賞し、グループで話し合いながら考える。

【鑑賞】(1 時間)「デザインの流れ」「ロゴマーク」について知り、今後の展望をもつ。

【表現】(2 時間)生活するうえで興味のある事や、不便だと感じることを基に、それを実現・解決するための会社を設定する。グループ内で意見を求めることにより、客観的視点も取り入れる。

○表現(8 時間)

【鑑賞】(1 時間)会社の内容が決まったら、ロゴマークを制作するうえで必要となるフォントや色のイメージについて学ぶ。

【表現】(2 時間)これまでの知識や思考を基にアイデアスケッチを行う。量を多く出すことで、目的にあったものを選べるようにする。

【鑑賞】(1 時間)アイデアスケッチができれば、グループ内で発表し、意見をもらうことでブラッシュアップを図る。

【表現】(4 時間)ブラッシュアップされたアイデアで、本番の制作を行う。画材や技法の指定は特になく、生徒同士の話し合いや、教員から個別に助言し制作する。

○鑑賞(4 時間)

【鑑賞】(4 時間)クラス全員の前で自分の会社、ロゴマーク、アイテムについてプレゼンテーションをする。制限時間を設け、時間内でいかに魅力を伝えられるか考えることで実践的な学びにつなげる。また、質疑応答の時間を設けたり、最後には投票を行うことで、他の生徒も能動的に聞くことができるようにする。

(3)実践報告および成果・課題・展望

実践を通して、以下の3点の成果が見られた。

①鑑賞と表現を段階的に繰り返すことにより、理解の深まりが感じられた。

鑑賞を基に表現することで、得た知識を活用でき、その表現を鑑賞することで、自らフィードバックを行い、次の表現につなげる…というサイクルができ、鑑賞と表現が切り離された関係ではなく、相互に理解を深めることができた。

②協働的に話し合う時間を設けることで、能動的に考える生徒が増えた。

教員からの個別の助言のみでは、生徒は受け身になってしまいがちだが、協働的に話し合う時間を設け、自ら意見を伝えたり、聞いたりすることによって、課題解決に向け、能動的・主体的に考える生徒が増えた。

③多様な意見を取り入れることで、発想力の広がりが見られた。

生徒同士で話し合うことで、教員からの一方的な指導や生徒ひとりで考えるよりも、本人の能力を超えた自由な発想の広がりが見られた。

課題としては以下の2点があげられる。

①鑑賞で得た知識に寄ってしまい、それ以上の発想をすることが難しくなってしまう。

鑑賞で見た実践例が「正解」「優れているもの」となってしまう、それを目指してしまう傾向が見られた。

②グループによっては話し合いに差が生まれ、他者に頼りきりになってしまう生徒がいた。得意である生徒に頼り、自ら考えるということが疎かになっている生徒が見られた。

今後の展望として、造形的な視点で物事を捉える力や、そこから発想を広げるプロセスを重点的に指導していきたい。そうすることで、個々の良さを認め合い、協働的な学びがより深くなると考える。また、AI等が発達する現代では、人間ならではの価値観が問われる。技術だけでなく、概念としての知識、経験からくる知識、視点や価値観、発想力、情操など様々なことを身につけることができるという教科の特性を生徒に伝えていきたい。

【英語科】

(1) 仮説

以下の2点についての仮説を立てた。

- ①リテリング活動を通して、学習した表現の定着に加え、生徒の英語を話すことへの自信や意欲を育むことができる。
- ②リテリングの手法や準備段階の指導を工夫することで、生徒が自ら最適な学習方法を調整できる。

(2) 実践方法

6月・9月・11月の3回にわたり、教科書の各 Lesson 終了後にリテリング活動を行った。使用教材は LANDMARK English Communication II (啓林館) である。

〈取り扱った題材〉

6月: Lesson 2 A Message from Emperor Penguins (part 2)

9月: Lesson 4 Seeds for the Future (part 3)

11月: Lesson 6 Gaudi and His Messenger (part 1, 2)

〈リテリングの手法や指導内容について〉

6月: 本文の内容や話の流れを確認し、テスト当日にイラストと使うべきキーワードを示した。

9月: リテリングするイラストを事前に示し、キーワードを数語に絞り、あとの語句を生徒が自由に設定できるようにした。また、練習の時間を1時間設定した。

11月: 9月と同様の方法で行った。内容についてはこれまでと違い、2パート分を範囲とした。

〈仮説の検証について〉

テスト終了後に行ったアンケートをもとに考察した。

(3) 実践報告および成果・課題・展望

〈アンケート内容とその結果〉

回を重ねるごとにリテリングの結果に対して肯定的な回答をする生徒の割合が増えている。また、英語を話すことに対する意欲も当初と比べて若干ではあるが高まった。

前述のとおり、リテリングのキーワード設定を9月から生徒自身が設定できるようにしたが、8割を超える生徒が表現の幅が広がるなどの肯定的な考えを示していた。

アンケートの結果は、以下の通りである。

「自分の中では、リテリングができましたか」

	6月	9月	11月
よくできた	4%	11%	13%
まあまあできた	28%	55%	65%
あまりできなかった	48%	31%	18%
全くできなかった	20%	4%	4%

「本文で学んだ表現を使うことはできましたか」

	6月	9月	11月
よくできた	15%	23%	31%
まあまあできた	33%	54%	55%
あまりできなかった	40%	20%	13%
全くできなかった	12%	3%	1%

「英語を将来話せるようになりたいですか」

	6月	9月	11月
そうだ	45%	56%	55%
ややそうだ	34%	37%	36%
あまりそうではない	17%	7%	7%
そうではない	4%	1%	2%

「4月と比べて、英語を話す力が伸びたと思いますか（11月）」

そう思う	20%
ややそう思う	59%
あまりそう思わない	18%
そう思わない	3%

〈課題と展望について〉

今年度行ってきたリテリング活動を通して、生徒の学習面や意欲面において教師の想定以上の効果を得られた半面、継続的な指導が必要であると感じた。また、リテリングが単元のゴールではなく、その後ライティングでまとめる活動や途中の音読活動への取り組みの強化が必要である。

これらを踏まえ、今後も「生徒が英語で発信する」活動などに積極的、継続的に取り組んでいきたい。

【家庭科】

(1) 仮説

〈ファッション造形基礎〉

ロイロノートを活用して、製作手順や注意点を自分で確認・見返すことで、学習の自律性を高めることができるのではないかと。生徒同士が教え合う姿が見られ、互いの理解を深め合う協働的な学びが実現されるのではないかと。ICTを用いた製作手順の配信に加えて、実物の作業工程ごとの見本を設置することで、生徒が自分で進めやすくなるのではないかと。教員が1人で20人の実習を見るため、質問で生徒が教員を呼ぶ回数が減り、自ら学ぶ姿勢を自然と作り出せるのではないかと。

〈消費生活〉

「①授業で基礎知識学ぶ➡②調べ学習➡③パワーポイントやロイロノートにまとめる➡④発表」を単元ごとに数回行うことで、生徒が基礎知識を理解し、テーマに合わせて知識を応用させ、自分の身の回りの課題を見つけ、意見をまとめて発表する力が身につくと考えた。



(2)実践方法

<ファッション造形基礎>

被服実習「ブラウス製作」でICTを活用した授業を行った。具体的には被服実習において作業の手順を事前に撮影し、ロイロノートのカードの機能を用いて授業前に作り方の手順を配信する。配信した内容は難しい作業は手元の目線で見ることができる動画を作成し、簡単な作業については写真で説明を書き加えた。授業の始めに全体の示範をしたのち、実物の段階見本を教室の前方に設置した。製作途中で生じる疑問や課題に対して、すぐに教員が答えを与えるのではなく、見本やロイロノートの資料を活用して自分で解決するように指示を行った。それでもわからないときは教員を呼ぶ仕組みで授業を進めた。また、各工程ごとに「合格チェック」を設け、生徒が自分の進捗を把握しながら、次のステップに主体的に進めるようにした。チェックする工程は生徒にわかるように黒板に書いておく。

<消費生活>

単元や大きなテーマごとに基礎を学習したのち、調べ学習をしてまとめさせ発表をする授業を何度も行った。テーマによって一人でまとめてグループで共有させる場合とグループでまとめクラス全体で共有させる場合に分けて活動した。

(3)実践報告および成果・課題・展望

<ファッション造形基礎>

被服実習は縫ったり、アイロンでの作業があるため、一度工程を進めると戻すことが難しい。示範では一瞬しか見えなかった工程を動画や写真で説明することで、生徒ごとにわからなかった部分を再確認することができるように利点を感じた。また、わからないところを振り返る際に周りの生徒と話し合ったり、教え合う姿も見ることができ、主体的・対話的に学習する姿を見ることができた。見本や他者の作品を参考にさせることで、他者の工夫を学び、自分の製作に活かす姿勢が育まれた。工程ごとに「合格チェック」を設けることで、次の合格までの目標ができ、区切りをつけながら学習することができた。ロイロノートを用いる前の実習では生徒がわからなくなったときに紙面上でしか自己確認ができず、すぐ疑問が生じると教員を呼ぶことが多かった。質問と「合格チェック」の生徒で列をなすこともあった。しかし、今回写真や動画で説明を配信することで、生徒が自分で振り返ることが増え、教員が一度に何人も質問に対応することが減り、「合格チェック」の確認に時間を以前より割くことができた。結果、教員に余裕が生まれるとともに、生徒も「合格チェック」の待ち時間が減り作業がはかどるようになった。

一方で「ロイロノートをああとで見ればいいので、示範をしっかり聞かなくてもいい」と思っている生徒もいるようで、実物での示範の際に手元が見えなさそうな場所から見たり、適当に聞いている生徒がいるのも実情である。進度に遅れを取りやすい生徒ほど、遠目から見たりすることもあるので、しっかりと声をかけ実物の示範が最も大切であることを伝えていく必要性を感じた。

今後も様々な実習で動画や写真で工程を配信し、生徒の主体性や対話的な学習を促していきたい。また、欠席した生徒への説明にもICTは効果的であるため、より分かりやすい動画の撮影や写真の撮り方と説明を心掛けていきたい。さらに、ICTだけに頼るのではなく、工程ごとの段階見本も増やしていき、実物での確認もしやすい工夫をしていきたい。

<消費生活>

授業で学んだ知識を使って調べ学習をさせることで、身近に起こっていたことが授業で学んだことにつながると気づく生徒が多く、身の回りのことに課題意識をもつことができたようになった。また、グループで意見の発表や共有を繰り返すことでだんだんと発表資料に工夫が生まれ、発表の仕方やまとめるちからが身についていった。発表が上手な生徒や資料作成が上手な生徒を見本に生徒一人ひとりが「次こそはよりいいものを作ろう」とする姿勢が生まれ、授業を追うごと発表が良くなった。日頃の会話や日直日誌でも、授業で扱った内容を意識して身近なことに問題意識を持つ生徒が現れ、調べ学習や話し合い、発表から課題意識を芽生えさせることができたと感じる。

8 まとめ（研究を終えて）

2年間のあいちラーニング推進事業における研究を通して授業改善に取り組む中で、学校全体として育てたい生徒像を共有でき、生徒がより主体的・協働的に学ぶ機会を確実に増やすことができたことが大きな成果である。また、ICTの活用については今回の目標には掲げていなかったものの、より多くの職員が効果的にICT機器を授業で使おうとしている様子が見受けられた。次年度からは年次進行で生徒のBYODが始まることもあり、ICT機器の活用が、主体的・対話的で深い学びにつながるよう工夫を重ねていきたい。今回得られた成果をさらによりよい学習活動につなげていけるよう、今後も継続して授業改善に取り組んでいく必要があると考えている。

※ 本研究報告書は、令和8年3月23日までに県教育委員会に提出する。